

# 歴史回廊

第8部「芸備孝義伝」の世界 ④

挿絵は、佐伯郡小方村(現大竹市)で貞享元(一六八四)年に起きた火事の様子を描いたものである。造り酒屋を営む佐伯屋助三郎は、自宅の土蔵を開放して他家の家財を避難させたり、炊き出しを行ったりした。その善行を広島藩が賞している。

「火事と噂は江戸の華」。江戸城下の火事が有名だが、広島城での状況はこうだったのだろうか。

■打ち壊し消火図る

浅野藩政時代(一六二九—一八七一年)の歴代藩主の事蹟を記録した「済美録」などによると、新開・近郊町村を含め広島城下で約百件の火事の記録が残っている。宝暦八(一七五八)年四月三日から五日にかけて、元安川以東の大半を焼失した「宝暦の大火」が最大のもの。昨年、こ

## 火事の恐怖 家密集 焼失は広範囲

の火事の痕跡が発掘調査で見られ、文庫だけでなく物証も確認された。

当時の城下には、燃えやすい建築材を使った家屋が密集していた。一度出火すると広範囲に燃え広がって大きな被害を出すことが多かった。周辺の家屋を打ち壊して延焼を防ぐのが主な消火方法だったため、家を失う人々が多数出た。

■組織強化 ポンプも

城下の防火体制は、元禄五(一六九二)年の火事までで分かる。出火した場合、四人の防火担当役(大番者頭)が足軽を率いて火元の東西南北地域を分けて消火し、町方からも町屋一軒につき二人ずつ手桶持参で火元へ馳せつけるよう定めていた。宝暦の大火以降は町組・町ごとの火消し組織の強化が図られ、消防ポンプである竜吐水も配備された。

城下の人々は火事のために大きな打撃を受けており、日ごろから「火の用心」には十分気を配っていた。しかし、当時の暮らしをみると、当時の暮らしをみると、灯りは行灯や提灯など火を灯す照明具を用い、炊事は竈や七輪を火力で煮炊きする道具を使用していた。冬場の暖房具も炭火を熱源とする火鉢、炬燵、行火などであり、常に火事の恐怖が城下の人々の平穏な生活を脅かしていたのである。



土曜日に掲載します

佐伯郡小方の火事を、人々の動きを交えて描いた「芸備孝義伝の挿絵」(広島市公文書館蔵) 任指導 主筆・片山和哉